

烏尾坡祖全書

卷一

島尾敏雄全集第16巻

一九八二年一月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1982 Toshio Shimao
Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

晶文社

ブックデザイン

平野甲賀

島尾敏雄全集第16巻・目次

「沖縄」の意味するもの	11
加計呂麻島	17
南島の冬	25
奄美大島から	27
奄美大島に惹かれて	33
奄美群島を果して文学的に表現し得るか？	35
南西の列島の事など	43
島の闘牛	46
竜郷紀行	48
名瀬の正月	50
久慈紀行	54

「大島代官記」について	61
二つの追悼文	66
文学果つるところ	70
われわれのなかの南	73
南島がもつ力	76
鹿児島県立図書館奄美分館の開館について	77
離島のなぐさめ	81
奄美通いの船	84
鹿児島県立図書館奄美分館が設置されて	86
奄美の夏	88
最近の図書館の動向	91
名瀬は混沌の中に	94
アマミと呼ばれる島々	97
南の島のどこか	100
沖縄らしさ	103

南島について思うこと

奄美大島

大島だより

南の島での考え

悲しき南島地帯

「泉芳朗詩集」について

「離島の幸福・離島不幸」あとがき

離れ島から

「エラブの海」をみて

日本の周辺としての奄美

沖縄芝居

軍政官府下にあった名瀬市

離島の中での選挙

「奄美の国語あれこれ」について

請島の結婚式

奄美の妹たち

奄美大島の食生活

台風常襲地帯

田舎司書の日記

ヤポネシアの根っこ

ふるさとを語る

南の島の雪

島の中と外

私の見た奄美

島の夢と現実

夏の日の輝き

奄美体験の途上で

島の正月

庭植えのパパイヤ

奄美の正月

日本文化の根

離れに暮らして

砂糖島の風土

奄美と私

与論島のモチーフ

季節通信

ふるさとの言葉

奄美の文化活動の現状

不思議な聴取契約

九年目の島の春

文明の陷穽

*

名瀬だより

一 名瀬の町、その最初の印象と町のすがたの

あらまし

248

250

253

255

257

258

270

271

280

281

289

292

二	その気候	301
三	町の人々と背後の歴史	309
四	島の中の町の現実	321
五	年中行事の意味するもの	327
六	市民生活など	340
七	災厄——台風とハブと癩と	349
八	名瀬のことは	363
九	周辺の村落	370
十	民間信仰	385
十一	島のカトリック	399

南島エッセイ I

1954—1964

「沖繩」の意味するもの

ぼくが沖繩に気持がひかれるのは、なぜだろうということを反省しないわけにはいかない。それはぼくがいかに沖繩の自然と人々に気持を寄せてみたところで、ぼくが沖繩生れでないという事実、ひとまず決定的なことだと考えないわけにはいかないから。

ふり返ってみるならば、ぼくが沖繩に心ひかれはじめてから、幾多の歳月が流れた。

たとえそのはじまりが少年の時に読んだ馬琴の「椿説弓張月」というような誇張されたつくりごとであったにしても、そのときの異様な興奮を忘れることはできない。それはどれ程か幼稚な理解であったことか。しかし、ぼくが興奮したのは、ちっぽけなこの日本の国のなかに、やっと辛うじて見出すことのできた、何かわくわくするような桃源郷の気配を感じたからに外ならない。

この日本の国の、眠くなるような自然と人間の歴史の単一さには、絶望的な毒素が含まれている。桃源郷などといえば誤解を招くが、ぼくがいたいのは、もうわれわれには見失われてしまった「生命のおどろきに対するみずみずしい感覚」をまだうそのように残している島が、この不毛の列島の中に残っていたということだ。

日本国中どこを歩いても、同じような顔付と、ちょっと耳を傾ければすぐ分ってしまうような一本

調子の言葉しか、ないということは、すべてのものを停滞させ腐らせてしまわずにおかない。そこでは鉄面皮なおせっかいと人々をおさえつけることだけが幅をきかす。おそろしく不愉快なひとりよがりと排他根性。違ったものがぶつかり合って、お互いに骨を太くし、豊かな肉をつけるという張合から、われわれは見離されていた。いや沖繩を再発見するまでは。長い間沖繩は薩摩の介在であいまいにされていた。

ある日、民芸品をあつかう眼付で沖繩が見直された。大和の人は物ほしそうに沖繩を見物に出かけて行った。そしてそこで、野放しにされている、感情の豊かな（というのは生活に裏打ちされたといってもいい）芸術品と、島の人々がおしげもなく使う典雅な古脈を伝えたと覚しい言葉を見出した。旅行者は、それらが保護されずに亡びゆくにまかせられていることをなげいた。沖繩の人々はもともと自分の郷土に自信と愛着を持たなければならぬと教誡した。しかし不思議なことに（実は当然のことなのだが）地元の人々はその呼声に不快な顔付をした。大和の人は多分感謝されると思っていたのに、好意がそのまま受入れられないことに腹をたてた。しかしこれはどこか筋が違っているのではないかと思わせるものを含んでいたのだ。

その大和の人たちの好意の中に、相変らず沖繩を腐らせてしまう要素を決して除こうとしていない部分の残っていることを、沖繩の人たちは本能的にかぎつけることができたのだ。

たとえば、あの沖繩民芸品展覧会というような場所にいったらいい。

そこには「おきなわ」などありはしない。ぬけがらがあるだけだ。沖繩の民謡と踊りが人寄せにつけ加えられるかも知れないが、それはとりすました会場の雰囲気骨抜きにされたものだ。やがて踊

りがたけなわになって、あの毛遊び風の乱調子になり鳩吹き口笛をならして沖縄の人々が乱舞し始めれば、大和人はぽかんと取り残されてしまう。沖縄の人たちの間に緊密な親和感がみなぎり、不運であつた歴史に対する反逆が凝集されるのだ。たとえばの話だが、沖縄民芸品を茶人のように身につけて、アメリカ風に着飾らせた子供たちにママと呼ばせている大和の奥さんたちは、ほんとのところ沖縄とは無縁ではないのか。彼女たちが別のところで、こんなふうにあったとしても、もともと矛盾ではない。彼女たちにとって、沖縄民芸品は宙に架っている装飾品だから。「あの人、沖縄の人ですってねえ。そういえば、どうりで言葉もどこかおかしいし、顔付もちょっと違っているようね」

ぼくが思うに、われわれは沖縄をそのようにしか感ずることができないという泥沼を周囲にめぐらし持っている。沖縄への関心などというものは（たとえば踊りとか蛇皮線とか歌とか言葉に対して持つ一種のエキゾティシズム）大なり小なりこの窮屈なわくから脱れることができない。精神の安易な部分がそれと結託する。いや何もぼくはそれらの現象を非難しているのではない。それらはもともとと商魂たくましく宣伝普及すべきだ。沖縄情緒は、商品として大和を完全に圧倒すべきだ。今のところその手しか残されていないと絶望的に肯定するわけだが、がまんがならないのは、鹿児島人は島人を仲間からはずし、するとその大島人は那覇人を、そしてナファンチュは糸満、久高人を、というように、順おくりの下さまに見ていく無意味な悪循環が、ぼくたちを窒息させていることだ。

沖縄の存在が、心をのびやかに開けてくれているということ（日本を多様にしている）をぼくは考える。言葉の通じない素晴らしい場所がわが国の中に確かにある、ということは、普通人々が考えている以上に（いや人々はほとんど気付いていないが）歴史の停滞を救って新鮮にする重要な要素であ

ることだ。そのことに気付かねばならぬ。

われわれを、過去において（そして実は現在もなおその要素を含んでいることを強調したいのだが）西の方の世界につないでいたものがあるとすれば、それはポルトガル人らによってゴレス人とカレキオス人と呼ばれて南海にふくれで行った沖繩の人たちこそ、それであった。

われわれはいっわりの多い官公文書を資料にした歴史だけが歴史なのだと思ひ込んでいるようなところがある。沖繩が新鮮な血液をいつも下積みの状態で日本の歴史に注入していた隠れた底の事実を、ひとつひとつ点検して確認すべきだ。

ぼくは沖繩に生れなかったことを後悔しているといってもいい。偶然がぼくを沖繩に近寄らせなかっただけなのだが（戦争だとか軍の機密だとか旅券だとかいう、そういう一群のけちくさい理由に、ぼくがつき当ったことが仮に偶然だとして）ぼくはせめて自分の子供に奄美大島人の血液を混入しえたことに満足しよう。いわばぼくは、半ば同じ被害者（いささか文学的過ぎるこういう言い廻しを許してほしいが）の地位を獲得した。（ぼくは妻の先祖が沖繩から移住してきたという言い伝えを信じているし、もともと奄美大島の諸島は沖繩三十六島として形成された事情もあるのだから。）

しかしやがてぼくは、東京の町なかできいた島のなまりがなつかしく、話しかけても、話しかけられた対手がなかなかその素性をあかしてくれない、という現実にもともにぶつかつた。それはそれだけの苛酷な世間の表情が存在しているという事実があった。南島の人たちがその出生をあらさまにしたがらない理由は従って生ずる。つかまえ所のないエアポケットのような場所での大和の人のひそひそ話をする声ができこえてくるからだ。

たとえば籍を東京に移してしまったり、大島の人ならば鹿児島県人だと返事をしたりすることは常識となっている。(もちろん、行政上大島は鹿児島県に違いないが。大島人は、与^ユだとか福^フだとか喜^キ計^ヘ、徳^{トク}などという一字苗字をかくそうとしてへそれは封建の時代に薩摩藩の恣意で強制的にそうさせられたのであるが、戸籍届をするときに名前の上に一字余分の字をくっつけてだす方法を会得した。たとえば福という家に男の子が生れて利夫という名前をつけたとしたら、「田利夫」と届出して置けば、少なくとも綴字の上で、その男の子は福田・利夫になることができる。しかし女の子は嫁に行き苗字が変わるからその方法がとれないために同じきょうだいで兄は福田、妹は福、と違った苗字で呼ばれるようなことが大島の小学校では珍しくない。)これは何というユーモラスな抵抗だろう。ぼくたちが伝統的な考え方にもしいやなら反対したとしても認められうる基盤がわれわれの社会にあるならば、こんなことはたちどころに消え去ってしまうだろう。こんな窮屈な心遣いなど誰がしよう。ほんのすこしだけ偏見を横の方に押しやれば、沖縄や大島の人名に表現された愛情の豊富さは他に比較しようがないことに気付くはずだ。

現実には、大和に上^{ノボ}ってきて、折れ曲って行くいきさつが南島人をこわばらせてしまっているのだ。歴史ののがさをかみしめている者は、だから、南島の人たちこそ、といわなければならない。彼等こそ、日本の怠慢に七首をつきつける権利を持っている。従って日本人や日本語の素性のあいまいさは、この場所からつきつめられなければならないし、日本の文学の動脈硬化はここから輸血されなければならないといえよう。もちろん見世物レビュー風ではなく対決しつつぶつかり合うという方法によって。